

## 第1学年、第2学年 総合的な学習の時間 実践報告

指導者 奈良教育大学附属中学校

教諭 市橋 由彬・吉田 寛

### 1. 単元名 「ひととの出会い」を通じた学び ～2学年合同地域フィールドワーク（奈良めぐり）～

### 2. 単元の目標

- ・SDGs・ESDを意識した地域フィールドワークのコースづくりを行う。…（知識・技能）
- ・ランドスケープの視点でものごとを多角的にとらえ、さまざまな視点から考察するとともに、他者と意見を交流するなか（協同的な学び）で、多様な考え方に気づく。…（思考・判断・表現）
- ・他者性を介した「ひととの出会い」を通じた学びを行う。…（主体的に学習に取り組む態度）

### 3. 単元について

#### （1）教材観・ESDとの関連

- ・1、2年生の生徒が縦割り班で8つのグループに分かれて、以下の8コースの地域フィールドワークを実施した。本報告では、この中の（D）（F）コースについて述べる。

(A) 古地図散策 (B) 観光とホスピタリティ (C) 奈良公園ランドスケープ  
(D) ミツバチから生き方を考える (E) 共生 奈良シカ (F) 春日山原始林  
(G) 奈良のおいしいを守るために (H・特別支援学級) 先輩の働く姿・身近な世界遺産

#### ○ [Dコース] ミツバチから生き方を考える

- ・Dコースは、「ミツバチから生き方を考える」というテーマで奈良めぐりを実施した。奈良市高畑在住の吉川浩氏に講師を依頼し、当日は奈良公園から春日大社参道、春日山原始林に生息する植物について解説していただきながら散策した。また、能登川沿いを下りながら、吉川氏が自然農法を行っている水田まで移動し、自然の恵みがいかにして街に下りてきているかを解説していただいた。吉川氏は無農薬でかつ雑草なども駆除せずに、稲作を行っている。生徒はその水田で、吉川氏が育てた稲に実った米粒を班に分かれて数える体験をした。1粒の米粒が4,000粒以上の米粒を実らせることに多くの生徒が驚き、また自然の偉大さを実感できる体験であった。最後に、生徒は吉川氏宅でニホンミツバチの観察を行った。実際に自分たちが1日歩いたエリアをニホンミツバチが活動していること、そのニホンミツバチが現在減っている原因に、自分たちが知らず知らずの内に加担しているという現実を知った。…【相互性】【連携性】
- ・SDGs11（住み続けられるまちづくりを）、SDGs12（つくる責任 つかう責任）、SDGs15（陸の豊かさを守ろう）、SDGs17（パートナーシップで目標を達成しよう）

#### ○ [Fコース] 春日山原始林

- ・Fコースは、世界文化遺産「古都奈良の文化財」に含まれる「春日山原始林」を対象としたコースである。春日山原始林は、古来より春日大社の神域として信仰の場であったため、9世紀頃には禁伐令が出されるなど積極的な保護がなされ、原生的な状態を維持する森林として特別天然記念物にも指定され守られてきたが、奈良県作成の『春日山原始林保全計画』によると、近年では、シカをはじめとする野生生物の食害による照葉樹林の更新不良やナラ枯れ被害の拡大等により、原生的な森林が変容していることが明らかになっている。2年生の生徒たちは春日山原始林を未来へつなぐ会の事務局長である杉山拓次氏から適宜アドバイスをいただきながら、現地の下見、事

前学習（「自然環境班」と「文化・歴史班」に分かれての調べ学習やポイントガイド練習、1年生へのレクチャー）を経て、本番当日は春日山遊歩道から若草山山頂に抜けるコースを散策した。また、事後学習では表現活動として「春日山原始林の世界観」というテーマで各自が絵を描き、それを貼り合わせて附属中学校版「春日山原始林曼荼羅」を完成させるとともに、「伝える」ということに着目することから、自然環境に対する思いがどのように育まれていくかを考えた。

…【相互性】【公平性】【連携性】

- ・SDGs11（住み続けられるまちづくりを）、SDGs13（気候変動に具体的な対策を）、SDGs15（陸の豊かさを守ろう）

#### 4. 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
[Dコース] ミツバチから生き方を考える		
・よりよい未来を創るため、自分たちが消費しているものの背景とそれらを消費することでの影響を考え、選択できるようになる。	・人間中心の考え方ではなく、すべての生物が共存していくための考え方を身につける。	・自分たちの生き方にある課題と向き合う。（自分事化する。）
[Fコース] 春日山原始林		
・春日山原始林と人との関わりを自然・文化の面など、幅広い視野から理解している。	・これまでの人間との関わりの中で、どのように森がのこされてきたのか（自然環境に対する思い）を考える。	・「自然の気持ち良さ」を五感で感じる。

#### 5. 単元展開の概要

【1・2年合同 冬の奈良めぐりに向けて】			
	教員	2年生 「探求の基礎を身につける」・	1年生 「学び方を学ぶ」
4月	(春休み)【職員会議】 ・縦割り冬の奈良めぐりの改変について合意形成	(4月) 学年・学級開き 春の奈良めぐり(斑鳩方面)	(4月) 学年・学級開き 春の奈良めぐり(平城宮跡)
5月	【各学年教員】 ・学年会議	(5月中旬) 臨海実習(鳥羽・答志島方面)	「学び方を学ぶ」 ・「なぜ、学ぶのか」 ・マインドマップの書き方
6月	【総合担当教員】 ・大枠の素案の作成	(5/29) 1・2年合同 ESD・SDGs 入門講座 (奈良教育大学 中澤准教授による講演)	
7月	(6/28)【1・2年合同教員打合せ①】 ・各コース担当教員の割り振り ・ねらいの確認 ・今後の流れの確認	(6/24) ・動画「SDGsとは」「SDGsと社会」視聴 ・興味関心のあるテーマの選択 <b>案マッチングがうまくいかなかった</b> 各コーステーマ案の提示 (7/5)・希望調査 ・メンバーの確定 (7/8) コース別事前学習① 1h ・テーマと目的を考える (7/10) コース別事前学習② 1h ・プラン(内容)を考える	・「ようこそ先輩」 (卒業生から、附中の学びがどのようにつながっていくのかを聞く)
	(7/19) 生徒・教員合同 実行委員会① ・顔合わせ ・コースごとに教員と生徒リーダーが打合せ		

	教員	2年生	1年生
夏休み	(夏休み期間中) コースごとに、生徒と教員で下見を実施		・ 県立図書館情報館探検ツアー (地域の社会教育施設の利用)  (9月)・「問いの立てかた」(校長先生)  (9月)・国際理解学習「世界が100人の村だったら」ワークショップ
9月	【各コース担当教員】 ・ 専門家や専門機関とのつながりづくり・相談	(9/13) 大学研究室訪問 (奈良教育大学)	
	教育実習指導(4週間)	(9/30) 奈良めぐりコース案の確定	
10月	【総合担当教員】 ・ 奈良教育大学の学生へサポート依頼	(9月下旬) 文化のつどい(2年:学級展示 1年:学級合唱) …9月中は、文化の集いに向けた事前準備に集中	
	(10/9)【1・2年合同教員打合せ②】 ・ ねらいの再確認 ・ 各コースの進捗状況の確認、情報交換 ・ 実施要項の作成	(10/3) コース別事前学習③ 2h ・ コースごとの学習(問いを深めるなど)  (10/10) コース別事前学習④ 2h ・ 1年生向け説明会の発表準備	(9/18) 学年事前学習① 1h ・ 「ランドスケープ学習とは」(附中教員による概要説明)  (10/25) 学年事前学習② 2h ・ 「ランドスケープ学習ワークショップ」(奈良県立大学井原敏ゼミによる出前授業)
11月	(10/20) 生徒・教員合同 実行委員会② ・ 1年生向けコース説明会に向けたリハーサル		
	各コース 生徒とともに 積みもがく毎日	(10/21) 1・2年合同 2年生から1年生へのコース説明会	
		(10/21) コース別事前学習⑤ 1h	(10/21) コースメンバー決め
		(10/28) コース別 1・2年合同 事前学習⑥ 2h ・ コースごとの学習	
		(11/5) コース別 1・2年合同 前日連絡(放課後)	
12月		(11/6) 1・2年合同 冬の奈良めぐり(8コース)	
		(11/7) コース別事後学習① 2h (11/14) コース別事後学習② 2h (11/21) コース別事後学習③ 2h	(11/11) 学級別事後学習① 2h  (11/18) 学級内発表会
		(12/5) 学年発表会	(11/25) 学級別事後学習② 2h ・ 作文 ・ コースマップづくり → 学年文集に収録予定
		・ 卒業研究 テーマ決め ・ 沖縄修学旅行 事前学習へ	

## 6. 成果と課題

E S Dは、持続可能な社会づくりに関する価値観と行動の変容を促す教育である。

本実践では、「ひととの出会い」を通して、「教師の変容」と「子どもたち(生徒)の変容」が次のような場面で見られた。

### (1) 「ミツバチから生き方を考える」に関する考察

「教師の変容」という点においては、「ひとに会う」価値を教師自身が見出したことが大きな転換点だったといえる。教師自身が吉川氏の語りを聴くことを通して、確固たる信念と危機感、自分事としての問題意識を感じて行動されていることを感じ取り、吉川氏の生きざまに生徒を触れさせることによって、生徒が自らの生き方をふり返り、葛藤する中で自分事として「つくる責任・つかう責任」に思考が行き着くのではないかと考えるように変化していった。

当初は、SDG sの理解促進が学びの主目的であり、ミツバチはその材料(教材)という位置づけであった。ところが、吉川氏という自然農法や養蜂の実践家と出会ったことによって、吉川氏の生き方から学ぶという、「こと・もの」からの学びから「人」からの学びに大きく方向転換をした。E S Dでは価値観や行動の変容を重視しているため、「こと・もの」から「～という状況なので〇〇しよう」ではなく、人の生き方から学ぶ方が、目的にかなっているといえる。

同様に「生徒の変容」についても、これまでは漠然と「自然のために…」と言っていたことが、自分事としてとらえることによって多くの課題が見つかるようになり、葛藤が生じるようになった。理想と現実の中で葛藤し、自分の中である種の「折り合い」をつけていきながらも、中学生にとって葛藤の中で様々なものの見え方が変わり、多角的に考えようとするにつながるのではないかと考えた。

## (2)「春日山原始林」に関する考察

春日山原始林の実践から明らかになったことは、自然環境を教材とする場合、課題については生徒にテキスト化して伝えることが容易ということである。春日山原始林においても、ナラ枯れやナンキンハゼ、増えすぎたシカによる食害などの課題は伝えやすかった。

一方で、自然環境の「よさ」「価値」を伝えることの難しさが改めて浮き彫りになった。自然環境のよさに気づかせるために、杉山氏はネイチャーゲームをしたり、目を閉じて森の声を聞かせたり、風を体感させたりすることで自然環境に着目させ、意識させる活動を取り入れている。その活動を通して自然環境に関する気づきを得る生徒もいれば、そうでない生徒もいる。杉山氏は「自分は春日山原始林が好きでこの仕事をしているのだが、この「好き」という感覚をすべての生徒と共有するのは難しい」とおっしゃっている。

「よさ」や「価値」は、感覚的なものであるため、伝えることが難しい。

このことから、価値観や行動の変容を促すには、合理的・科学的な「知識」だけではなく、「感性」「感動」が必要であるという提案をする。

杉山氏は春日山原始林でガイドをされる際には、思いもかけなかったものを見つけると、その都度ツアー参加者に紹介しているが、杉山氏の生き物を見つけた「喜び」「驚き」は、ツアー参加者に伝染し、共感することがあると言われている。これは、「ミツバチから生き方を考える」の考察の「生徒の変容を促すには、まずは教師の変容から」と関連する。指導者が感動したことが子どもに伝わるということである。

そして、もう一つは、「フィールドワーク」、つまり、現地でこそ感じ、学べることである。

フィールドワークしながら色々と話したり見せたりすることによって、子どもの「あこがれ」が喚起され、「よさ」や「価値」への共感が生まれるのではないだろうか。見過ごしがちな生き物を目ざとく見つけて喜んだり、自然環境に関わる話題を色々と提供するためには、下見をしたり文献を調査したりといった事前研修が必要である。春日山原始林について「知っている」ことが想定を持たせ、想定通りの生き物を発見できたり、想定以上の生き物が発見できたりという「感動」が子どもに伝わり、あこがれを生むことで、子どもの春日山原始林に対する関心が高まるのである。

知識だけでは人の行動は変わらない。知識と感動（感性の揺さぶり）があって、人は自らの行動を変えていく。あるいはESDが目指す変容を促すためには、ESDが模範となるような生き方をされている方と子どもを会わせるのが効果的ではないだろうか。

一方、行動の変容をみる時期については、教育の成果はすぐに出るものと、ずっと先になって出るものがあるという共通認識のもと、すぐに結果を求めようとする昨今の教育情勢に流されることなく、長期的視野で子どもの変容を促す教育が求められている。

なお、本実践では、「ひとに会う学び」への比重が大きすぎて「ランドスケープ学習の視点」が不足していたことが課題として挙げられる。「ひととの出会い」を通してその人の「生き方」に迫るとともに、その人が生きてきた歴史的な時間・空間の背景を地理的な読み取りも踏まえて深めていくことによって、いのちの在り方（働き方や暮らし方などの存在様式の多様性）に気づく機会ともなり、自分事化が図りやすくなるを考える。